

『吾輩は猫である』黄金

Junko Higasa 2016.6.9

第十一章は、吾輩の最期である。そこに重ねられるのは、トーマス・グレイ(Thomas Gray)が書いた、親友の飼い猫への哀悼抒情詩「Ode on the Death of a Favourite Cat, Drowned in a Tub of Gold Fishes」(金魚水槽で溺れた愛する猫への鎮魂歌)である。

この詩の中でセリマという雌猫が寝そべっているのは格調高い花瓶(vase)の傍なのだが、この vase という言葉には「甕」という意味もあり、「吾輩」が溺れたのは甕の中である。そしてセリマは、水槽の中の金魚が目の前を通り過ぎる時に見せる金色に輝く鱗に心を奪われ、それを捕まえようとして足を滑らせ、深い水槽に落ちて溺れたのである。これは目の前の黄金に心を奪われ、それを得ようとして足元を見ないとやがて命を落とすという警告なのである。

グレイは詩の中程で言う。魚の嫌いな猫がいるだろうか。黄金を侮る女性がいるだろうか。そして最後に綴る。たとえ黄金であろうとも、それは自分にとって必ずしも得るに相応しい物とは限らない。結果として、猫は命と引き換えに、その教訓を残してくれたのだと。

漱石は女たちに言う。富裕に心を奪われて結婚相手を択んでも、それは必ずしも自分に相応しい相手とは限らない。また男たちに言う。目の前の利潤に惑わされれば、国家と個人の未来はない。自分の『猫』は検閲の命の危険覚悟でそれを教えているのだ、と。